

マリア・カデンツァヴィ
ナ・イヴ、世界一位の
女

ルシェド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セレナ「知ってる姉さん? 原田泰造がザ・センターマンのコントをやっていた時、妻
はテレビを見ないようになした上で『あれやめて』と原田に言い、娘は父のあんまりな姿
に泣き出してしまったそうよ」

マリア「何故それを今ここで言つたの、セレナ」

目

次

ごつつええ感じに戦姫絶唱しないシン

フォギア

1

ごつつええ感じに戦姫絶唱しないシンフォギア

ベッドで死にかけるエルフナイン。

そのエルフナインの手を取り励ますキャロル。

この光景を描写する文面からは、溢れ出る原作GXへのリスペクトが感じられることだろう。

エルフナインは、憐れに呟いた。

「キャロル……僕はもうすぐ死ぬんだね……」

「バカなことを言うんじゃない、エルフナイン！」

「嘘です、僕は知ってるんです。僕はもうすぐ死ぬんだって……」

「何を言つてるんだ！ 今日は世界一位の人がお見舞いに来てくれるんだぞ！」

「嘘です！ 世界一位が来るわけないじゃないですか！」

その時、ガラガラガラと病室のドアが開く。

「こんにちは、エルフナイン。世界一位のマリア・カデンツアヴナ・イヴよ」

「わあ、ホントに来てくれた！ マリアさんが世界一位だつたんですね！」

「おい待て貴様」

2 ごつええ感じに戦姫絶唱しないシンフォギア

現れたただの優しいマリアを、キヤロルが睨む。

「貴様、全米ヒットチャートで一位を取つただけで、聳冒目に見ても全米一位でしかn」
「緒川慎次！」

「はいっ！」

「?」

「マネージャーの貴方に聞くわ。私は去年、世界何位だつた?」

「一位です」

「よしんば私が、全米一位に過ぎなかつたとしても?」

「世界……一位です」

ただの野心に満ちたマリアが、不敵に笑う。

「そういうことよ、キヤロル」

「どういうことだよ」

「ねえ、マリアさん、どうしたら世界一位になれるんですか?」

エルフナインの顔には、隠し切れない憧れが浮かんでいた。

「うーん、例えば19歳で魔法少女(笑)で言われる人が居るわよね」

「はい」

「私は21歳。でも私はガングニールの少女。」

たとえそいつが19歳で少女（笑）だつたとしても、私は少女（真）。

そいつが19歳で少女じやなかつたとしても、私は世界一位なのよ、分かる？」

「うん」

ただの野次を口にするマリアが得意げに笑う。

「考えてみると、私は二期で半ばネタ氣味な位置から始めさせられたのだよ」

「そうなんだ」

「あの頃が一番辛かつた。

よく12位の奴とネットの人にいじめられたものよ。

一番いじめられたのは手紙を書いた切歌だつたけど

「アレでネタにされないとありえないじやないですか。

俯かない響さん、暴走しない響さんくらいありえないですよ」

「その頃はいつも妹の名を呼んで枕を濡らしていたわ」

「そうなんだ……世界一位さん、握手をしてくれませんか」

「頑張るのだよ」

ぐつと少女の手を握り、たぶん（容姿の）やらしさなら（世界一位を狙える）マリア

が笑う。

「緒川慎次！」

「はいっ！」

「私は去年、全米何位だつた？」

「一位です」

「今年、日本一位は誰だ？」

「翼さんです」

「よしんば私が、日本二位だつたとしたら？」

「世界…………一位です」

不動の世界一位、それがマリア・カデンツアヴナ・イヴ。

「いや二位だろ！ 一位になれてないだろハゲ！」

叫ぶキヤロルの言葉も、ただの厄介なマリアには届かない。

「世界一位のマリアさん、僕も世界一位になれるかな？」

「はつはつはつはつはつはつはつはつはつは！」

ただの野暮な質問じやないかとマリアは笑う。そこで、彼女の電話が鳴つた。

「失礼。もしもし？ 何？ 私を二位だと言う奴が居る？」

そいつは何位なの？ ガリ位？ ……ああ、ガリイね、分かつたわ」

マリアは通話を切り、ドアを開けた。緒川も無言でその後に続く。

「失礼するわ。トゥーマーンなだけに真つ二つにしてきてあげましょう」

「なんだこいつマジこわい」

病室の少女達に戦慄と希望を与え、マリアは去つて行く。
世界一位の戦いは、まだ始まつたばかりだ！